| イベントレポート |

株式会社日立ソリューションズ

HITACHI

AIは企業と仕事をどう変えるのか

―― 「使う」から「変える」へ、AI時代の組織と実装を考える

AX 2026

AIトップランナーたちの見ている世界

AIの進化は、単なる業務効率化のためのツール導入にとどまらず、企業の仕事の進め方や組織のあり方、人間が担う役割そのものを変えようとしている。

2026年10月7日に実施した「AX 2026 ―AIトップランナーたちの見ている世界―」（主催：日立ソリューションズ）では、AIがビジネスや組織に与える変化を捉えた基調講演に続き、AIを実際の仕事やビジネスにどう取り入れていくのかを考えるパネルディスカッションを実施。さらに、当社・北林がAIトランスフォーメーション（AX）の実践を通じて、AIを企業の現場に実装し、定着させるための考え方を紹介した。3つのセッションを通じて浮かび上がったのは、AI活用の焦点が「AIを使えるか」から、「AIと人がどう協働し、企業固有の知識や顧客価値につなげ、事業に定着させるか」へ移っているということだ。



東京大学未来ビジョン研究センター
特任教授
西山 圭太氏



TVプロデューサー
佐久間 宣行氏

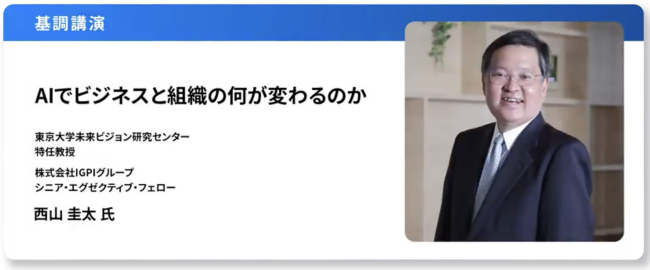


株式会社なかよし 代表取締役
ハヤカワ五味氏



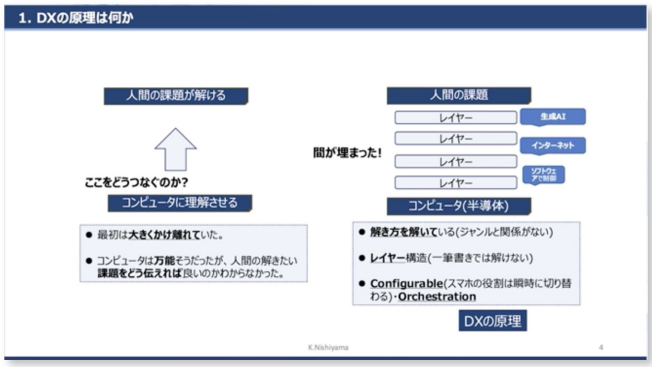
株式会社日立ソリューションズ
チーフAIエバンジェリスト
北林 拓丈

01 AIの進化が変える、ビジネスと組織の構造



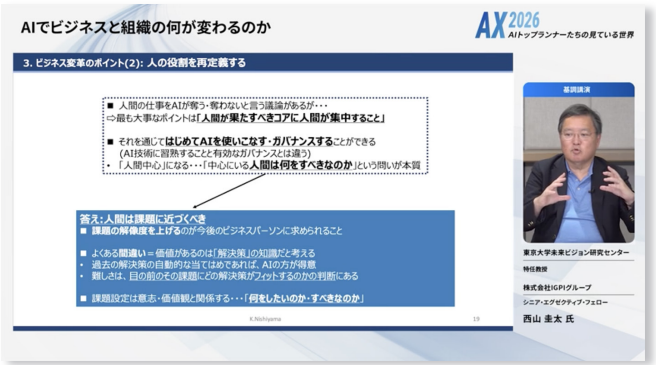
基調講演では、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授/株式会社IGPIグループ シニア・エグゼクティブ・フェロー　西山 圭太氏がAIの技術的な進化を踏まえながら、AIによってビジネスや組織の構造がどのように変わるのかを解説した。

デジタル技術は、特定の業界や業務だけに閉じたものではなく、さまざまな領域へ横断的に適用できる「横割り」の技術として進化してきた。生成AIでは、人間が自然言語で課題を伝えることで、コンピューターから直接答えを得られるようになり、人間とコンピューターの間にあった距離はさらに縮まっている。



その背景にあるのが、ディープラーニングやLLM（大規模言語モデル）の進化だ。大量のデータから学習するAIは、パターン認識など従来は人間が得意としていた処理を扱えるようになり、LLMによって自然な対話や文脈に応じた処理も可能になった。さらに現在は、単に答えを生成するだけでなく、判断や行動まで担うAIエージェントへと進化しつつある。

こうしたAIの特徴として示されたのが、人間とは異なる「得意領域」だ。AIは、多数のエージェントを並列に動かして処理したり、人間より広範囲の情報を関連付けたりすることを得意とする。一方、人間には、データが十分に存在しない初めての状況で判断することや、その場の相手や文脈に応じて問いを変えること、まだ経験していないことに挑戦することなどに強みがある。



だからこそAI時代に重要になるのは、AIに何を任せるかだけではない。人間が何を担うべきなのかを捉え直すことだ。解決策や過去の成功パターンをAIが扱えるようになるほど、人間には「いま何を解くべきなのか」「何が重要なのか」を見極め、価値や意味と結び付ける役割が求められる。AIによって人間の仕事が単純に減るのではなく、人間が担う仕事の意味が変わっていく、という視点が提示された。

02 AI活用の鍵は、人間の創造性と企業固有の知識



続くパネルディスカッションでは、株式会社なかよし代表取締役 ハヤカワ 五味氏をモデレーターに迎え、基調講演に引き続き西山 圭太氏、TVプロデューサーの佐久間 宣行氏、当社 業務革新統括本部AIトランスフォーメーション推進本部 チーフAIエバンジェリスト 北林 拓丈が登壇。AIを実際の仕事や創

造活動にどう取り入れていくかを議論した。

AIの身近な活用方法として語られたのが、アイデアを整理したり、考えを深めたりする「壁打ち」の相手としてAIを使う方法だ。AIとの対話を重ねることで、一人では見つけにくかった論点を発見したり、考えを構造化したりできる。一方で、AIが出した答えをそのまま受け入れるのではなく、人間自身の知識や経験と照らし合わせ、判断することが欠かせない。



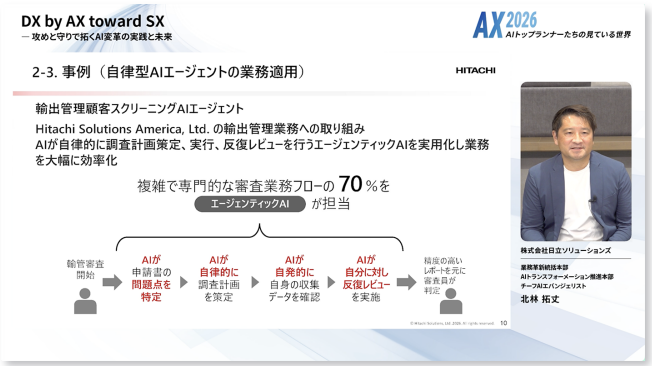
さらに議論が進むと、AI活用において重要なのは、一般的なAIの性能だけではなく、「その企業だからこそ持っている情報」にあるという点が浮かび上がった。社内に蓄積された知識や過去の判断、顧客との関係、業務の中で培われたノウハウなど、形式知になっていない情報をどうAIに生かすか。こうした企業固有の情報をAIによってさまざまな仕事へ展開する考え方が示された。



また、AIは新規事業の進め方にも変化をもたらす。仮説の整理や調査、プロトタイプの作成などを短時間・低コストで進められるため、最初から正解を出すのではなく、小さく試して失敗し、そこから次の仮説につなげるサイクルを速く回すことが可能になる。顧客の現場に入り込み、課題の発見から実装までを進めるFDE（Forward Deployed Engineer）の役割についても議論され、AIによって「失敗を素早く行い、より提供できる価値にフォーカスしていく」ことが、顧客価値を高める一つの方法として示された。

一方、AI活用を広げるには、セキュリティ、著作権、ハルシネーションなどへの対応も必要だ。パネルでは、ルールを設けて利用を制限するだけではなく、AIを安全に使うためのガバナンスをどう設計するかが重要だと語られた。クリエイティブ領域では、人間がどこに関与したのかを明確にする透明性の重要性も指摘された。

03 「使えるAI」から「定着するAI」へ―実装を支えるAX

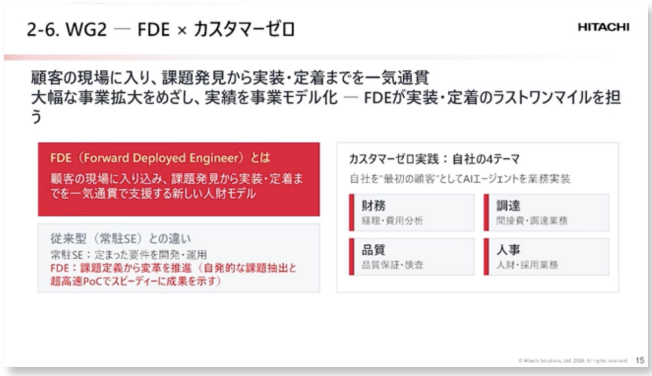


イベントの最後を担った当社・北林の講演では、ここまでの議論をさらに実践へと進め、AIを企業の現場に実装し、定着させるための取り組みが紹介された。

北林によれば、AI活用をめぐる議論は、「エージェントが使えるか」から、「安全・安定・採算性を確保しながら本番運用できるか」へと重心を移している。その背景には、AIの性能そのものよりも、実際の業務へ組み込む際の実装や定着が大きな壁になるという認識がある。

日立ソリューションズでは、AIによる事業拡大や開発生産性向上を目指し、営業、事業部、スタッフ部門が一体となってAXを推進。なかでも特徴的なのがFDE（Forward Deployed Engineer）の取り組みだ。FDEは、顧客の現場に入り込み、課題発見から実装・運用・定着までを一気通貫で支援する人財モ

デルである。定められた要件に沿って開発するだけではなく、課題そのものを見つけ、短期間でプロトタイプを作り、顧客に示しながら解決策を具体化していく。



また、自社自身を「カスタマーゼロ」として、財務、調達、品質管理、人事などのテーマでFDEを実践。そこで得られた知識を全社で利用できる自律的活用基盤へ集約し、エージェントや社内情報の横断検索、ナレッジ共有、利用状況の可視化などを進めている。個人がAIを使うだけでなく、現場で得た知識を組織に蓄積し、次の活用へつなげる仕組みづくりがポイントとなる。



さらに、AIエージェントが自律化するほど、従来の「すべてを事前にルール化する」方法だけでは対応しきれなくなる。そこで重要になるのが、企業固有の文脈や判断履歴をAIに与えることだ。北林は、企業固有の文脈を整えることがAIの不適切な判断や出力リスクを抑える土台となり、攻めのAI活用で蓄積した知識が、そのまま守りのガバナンスにもつながると説明した。

つまり、AI活用の壁はAIそのものの性能ではなく、実装と定着の方法にある。業務プロセスの中にAIを組み込み、企業固有の文脈を整え、小さく始めて効果を測りながら広げていく。こうした実践を通じて、AIを一時的なツールではなく、企業の仕事の仕組みとして定着させていくことが求められている。

04 AI時代に問われるのは「何をAIに任せるか」だけではない

3つのセッションを通じて見えてきたのは、AI活用のテーマが、単なる省力化やツール導入から、企業や人間の仕事そのものを再設計する段階へ移っていることだ。

基調講演では、AIと人間の得意領域の違いを踏まえ、人間が「何を解くべきか」を考える役割の重要性が示された。パネルディスカッションでは、その考えを現場に引き寄せ、企業固有の知識や人間の創造性、顧客との対話をどうAI活用につなげるかが議論された。そして北林の講演では、そうしたAI活用を実際の業務に組み込み、知識を蓄積しながら組織全体へ広げていく実装の方法が示された。

AIの能力が高まるほど、企業にとって重要になるのは「AIを導入したか」ではなく、「AIによってどのような仕事を生み出し、どのような顧客価値につなげるのか」という問いになる。AIに任せる領域を広げる一方で、人間が課題を定義し、価値を判断し、企業固有の知識を次の仕事へつないでいく。その両輪をどう設計するかが、これからのAIトランスフォーメーションの焦点になりそうだ。